

評価を工夫した『平家物語』の群読

単元の構成

本単元は、1年生の『竹取物語』などの古典入門から発展して、古人の心に触れ、自らの心の問題として考えていく学習をめざしています。そのために取り入れたのが群読です。教材は、古文と漢文の2系統で、古文は随筆として『徒然草』と『枕草子』、物語文学として『平家物語』を、漢文は漢詩を配置してあります。また、群読の教材として、現代詩『夕焼け』を扱います。

教材の概観

『平家物語』は、文体からみれば和文の要素と漢文訓読体の要素とを融合させた和漢混淆体であり、内容からいえば新しく台頭した武士の力による勢力争いに焦点が当てられた物語です。歴史とのかかわりを直接にもつ軍記物語の常として、人々の動静を、その言語を通して外側から描き出し、人物の心理のひだに立ち入ることをしません。雄渾かつ華麗な表現に、人物の状況や生き方などがリアルに表現されています。

教材化に当たっては、前書きと口語訳の部分、原文の下に口語訳を付した部分とで構成し、展開を追いながら自然に原文になじむよう配慮しています。

教材の展開と指導の重点

代表的な軍記物語であることと、独特の声調を備えた名文であることの二点を踏まえて指導していきます。今回扱う「扇の的」は、口承文芸としての特質を理解する上で、何より音声化が必要です。また、朗読指導を行うことで作品の理解がより一層深められる作品です。

ここでは、作品固有の特色を生かしながら、楽しさを味わう指導として、加えて音声言語による表現と理解との相互的な指導を試みるために、群読を指導の中心に据えます。また、読解・鑑賞などの活動を適切に組み合わせること、さらに、社会科との関連、視聴覚教材の活用など、側面からの援助を工夫すること、などの点に留意していきます。その際、細部の分析や第二義的な問題に深入りせずに焦点を絞り、原文の魅力を満喫し、古典に親しむことを中心に指導を進めていきます。

評価の工夫

○ 座席表の活用

座席表のコピーをもって授業に臨み、授業中、各個人について気づいたことを各個人の枠にメモしていきます。授業中、生徒たちがノート整理をするようなちょっとした時間に書き込んでいきます。

○ 群読台本の活用

実際に群読した音声表現を評価すると同時に、その意図や計画を評価するために、群読台本を使います。これにより、表現技術の拙さ故に実際の群読には表れなかった陰の意図や計画をも評価することができます。

○ 相互評価の活用

評価は、点数つけ、ランクづけのために行うのではないため、○×をつけたり点数をつけたりすることは避けます。記述式にし、具体的に気づいたことを記入するようにします。これならば、回収されてきた評価表を見て、本人は自己の群読を改善する具体的な方法を得ることができます。

評価の活用

座席表に書き込んだメモは、機会をとらえて、本人にその内容を知らせて、次の機会への具体的なアドバイスと意欲づけとします。

また、学習前と学習後の自己の変容を本人に知らせる場を設けて、自己の伸びを認識させます。相互評価の結果は、「学習の足跡」として、本人に書かせる場を設けます。これにより、自分がまわりに認められたという満足感と次への意欲をもつことができます。